岩と雪の歌

山岳名著シリーズ

二見書房

昭和49年2月5日　初版発行

© 1974 YU. AKIYA. Printed in Japan.

岩と雪の歌
定価850円

著者　秋谷　豊
印刷　株式会社堀内印刷所
製本　株式会社徳住製本所

振替口座東京2639番
電話東京263局0034番
東京都千代田区三崎町2-18-2
発行　株式会社　二見書房

0095-740103-7339

岩と雪の歌／目次

山の四季

青春の地図　12
沼のほとりの山小屋の歌　17
尾瀬に死す　27
霧（詩）　31
孤独の岩壁（詩）　34
夜の刻（詩）　36
穂高新雪　38
立山　46
北八ツ幻想　48
冬山（詩）　53
春の嵐（詩）　54

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

山小屋の電話（詩） 56
秋の遠方（詩） 58
八幡平 61
暮坂峠 67
屋久島 76
島への道 81
テントの中の青春 91

詩のある風景

戸隠 96
軽井沢 99
美ヶ原 103
八甲田の沼 106

鳥海山 108
白い音楽 110
蔵王 112
山の絵本 115
富士山 117
幻の山 121
小海線 126
磐梯山 130
大山 133
春の序曲 137
ヒマラヤ漂泊
白い山（詩） 144

水　甕（詩）　146
谷　間（詩）　148
氷河の岸辺　150
石だたみの町　156
赤い花のレイ　161
雨　期（詩）　164
ランプを持った女（詩）　166
ヒマラヤ鉄道　168
エベレスト街道　174
探検記（詩）　196
幻の村（詩）　201
アラスカの白い闇　205
火草―アラスカ紀行―　211

二月の山賊（詩）　216
きつね（詩）　218

ハーケンの歌

ひとりぼっちの山　222
文学と探検　229
回　答（詩）　234
探検の思想　236
山の詩のノート　240
雪の上の足跡　247
北の山（詩）　250
足　跡（詩）　252
秋の鎮魂歌（詩）　254

山の別れ（詩）　256
強力伝　258
山と詩人　261
北越雪譜　267
あとがき　275

装幀　栃折久美子
カット　安達　東彦

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

岩と雪の歌

山の四季

青春の地図

私は埼玉の平野の小さな町に生まれた。晴れた日は、富士山がびっくりするほど、はっきりと近くに見え、西方に秩父の山々がむらさき色にけむって長くつらなっていた。

そんな平野の町で育った少年の私にとって、川といえば、町のはずれを流れる荒川が、ただ一つの川であり、山といえば、その荒川上流に荒々しくつらなる秩父の山塊が、山のすべてであったのである。

まだ幼いころ、私はその秩父の山の村で一時期を過ごしたことがあった。私の父は、私が九歳のときに死んだ。母も父が亡くなって、ものの一年もたたずに、死んでしまった。町の石屋だった、私の家は没落し、幼い私は秩父に近い父の実家に一時、預けられたのである。

父の実家は、村では何代もつづいている家で、防風林に囲まれた屋敷の裏のあたりは寂しく、夜になるとボオッ、ボオッとふくろうの声が聞こえてきたりした。母屋(おもや)から少し離れたところに

納屋(なや)があって、祖母が毎晩、はたを織っていた。このへんから秩父にかけては、昔から繭の産地で、くず繭から糸をとり、若い嫁さんがはたを織って、家中の晴着をつくったものであった。

山の村は麦と桑畑、男は山稼ぎを業とし、女は蚕を飼い、絹を織って町へ売りに行った。秋になると、盆地の秩父の町では、絹と生糸の市が立った。

夜ふけ、ランプを持って、祖母のいる納屋に近づくと、祖母はやさしく言うのだった。

「灯の油を絶やさないようにしろや」

納屋ではランプを使っていたので、灯に油をさすのが私の役目だったのである。

この村からは甲州にも道が通じていた。秩父と甲州を結ぶ峠のあたりの空には、どの夜も星がいっぱい出ていた。昔はその甲州から糸くりの女たちが、馬に乗って峠を越えてよくきたもんだよと、祖母は話してくれたこともあった。

それから、何年かたって、私は東京の中学校に入るため、この村を去って行ったが、たまたま地理の時間に習ったシルクロードに興味を覚えた。シルクロードはいうまでもなく、中国からヨーロッパに絹を送り出す道であり、また東西の文明と人との交流にもなった道であった。

私はこのシルクロードの話から幼いとき祖母によく聞かされた秩父と甲州を結ぶ一本の道を思い浮かべた。

その道は熊谷から中山道と分かれ、秩父盆地を通り雁坂峠を越えて、甲州の広瀬に出る街道で、秩父往還と呼ばれていた。私はこの道を故郷のシルクロードだと思った。

ラクダを道づれにして越える砂漠への道は、また私にとっては秩父の山への激しい思いとなって点火されるランプのようなほのぐらいあこがれといっていいものだった。

しかし、熱にうかされた少年のように、思いだけは遠くへ飛んでいくのだが、私はいまだにあこがれのシルクロードへ行くことを果たせないでいる。

幼い私は東京の叔母の家に引き取られていったが、東京へ行く汽車の窓から、なにげなく西の空を振り返ると、とつぜんうすむらさきにけぶっている山々が見えた。それは秩父の山々であった。それらの山々にまじって、ひときわ深い色をしてせり上っているのは武甲山でもあろうか、私は日没のひとひらの雲のかげにゆっくりと沈んでいくその山をうつくしいと思った。

東京の街角からも、その山は眺められた。だが、私は秩父の山々にあこがれながら、いちども登ったことはなかった。

しかし自分の長い山旅で私が最初に登ったのは、この秩父の山であったのである。

その一つの山頂、雲取山へ登ったのはたしか中学三年の夏であった。

そのときは、級友の一人と、三峰から雲取山へ夜中を登っていった。

いまでこそロープウェイができて、三峰山頂まであっというまに登れるが、当時は細くけわしい山道を、カンテラを手にして足もとを照らしながら登っていったものである。くたくたに疲れ切って小屋につき、

「今晩は」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo